

先進繡像玉石雜誌

羽



先進繡像玉石雜誌卷第五

名和伯耆守源長年肖像并傳

舟上山名和湊 元亨二年乃升 衛門府

左右京圖 當直門 國司守護職乃差別

行幸路程 兵庫藥仙寺 真跡文書 京の宅

二本一草乃と 大内裏諸門鴟尾

兼好法師壽像并傳

神風和記 冷泉万里小路教 常盤井教

中宮乃小辨 堀川大相國 延政門院一條

鎌倉比企谷兼好住居地 鯉魚 平貞直

大佛 大覺寺御移徙 道我僧心





名和伯耆守源長年肖像

名和某藏

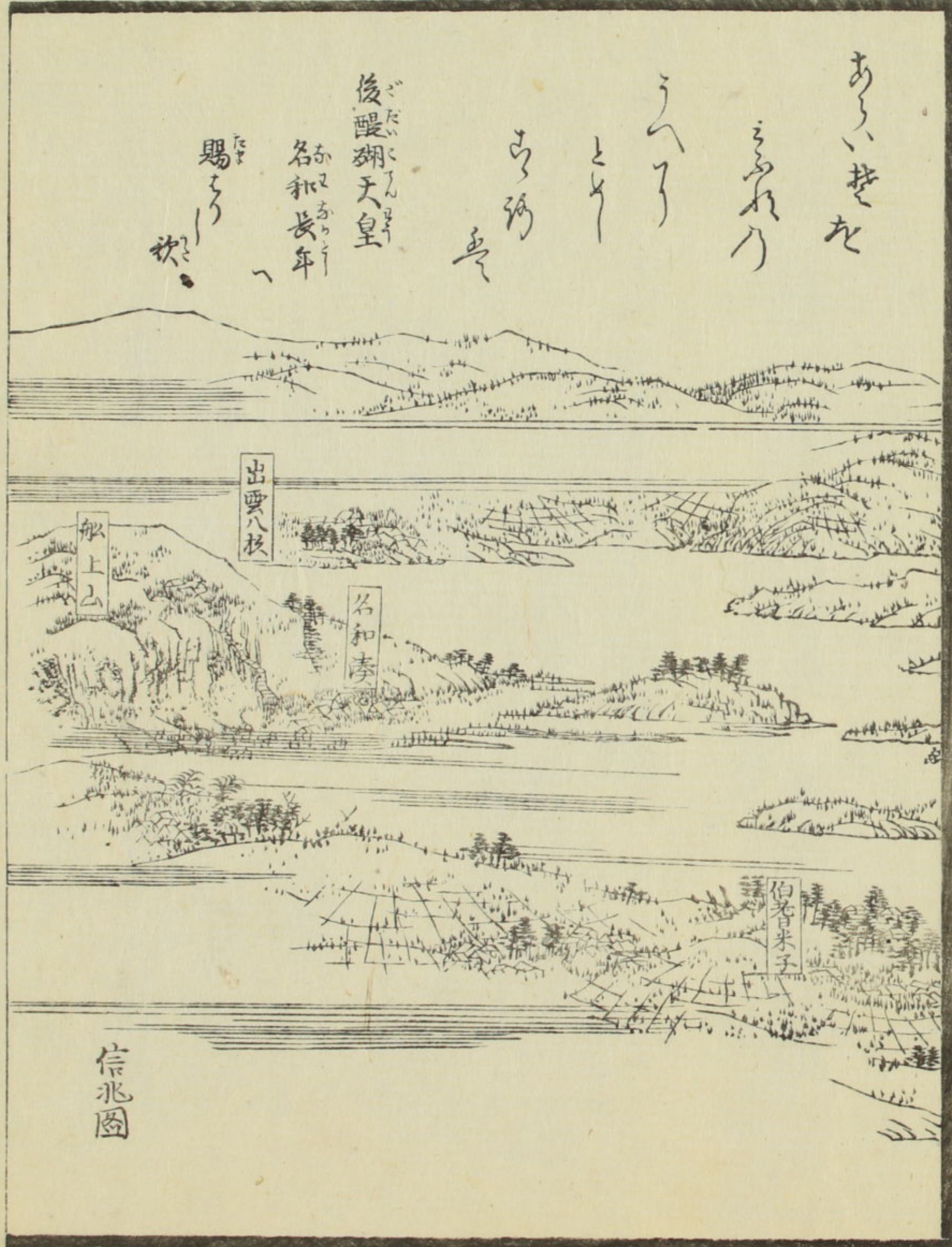
山門靈山院 本曾然兼好菴室の地
 本过长泉寺兼好家 兼好塔銘 見好法師
 真跡和歌 曰天皇乃歌

名和伯耆守源朝臣長年ハ伯耆國會美郡名和莊地頭不
くも先ハ又左郎長高と云遠く先祖を尋ねて是ハ村上元
皇乃皇子中務卿具平親王乃十五代乃孫不しく追々由緒を
きく承久三年後鳥羽院乃北条義時を遣付あるへ
くも國々乃勇士をめさせ授け分ける守治格々向々軍
あく所領を義時奪ちて名和伊集院秋之孫あて同
き紗高乃嫡子あり長年一族ひろく家富たふのそあらはる
馬乃道々健うろ々色は國中了餘を無ふる人あも無
元弘二年二月七日後醍醐天皇華洛を御出あうく二月二日
隱岐島へ遷幸ありく知夫郡國分寺乃御所おこす
都より鞍の方あり紗程伯耆國名和湊まう五十九里餘名和湊より
隱岐島まうく二十里ろちろ合まう八十九里詳とるへき

隱岐島乃守護職佐々木隱岐判官清高佐々木源三義
の五男五郎義清
二代の孫了隱岐近國乃一族塩屋富士名を始して名和
村上の輩まう催集り皇居を守護しなける天皇
慮慮深くおりまうて守護乃武士お或時ハ御盃を給
ある時々恩詞をいけりまう一程おははら従ひ備く兵
出まふけりまう聖運開けへまうまう好りけるまう長年
乃弟小名和伊集院氏と云々のあり皇居の守護ふまうたり
けるを天皇親しく召かけし行氏たちまう心愛は
て兄あうける長年を請ひし清伊集院まうへまう中々伯
耆國へ引返まう去りまう行氏隱岐島へ後まう順風を給
けり内了天皇ひまう國分寺の御所を出所あうく

ふめさき元弘二年閏二月廿七日和湊へ漕寄らむ千
種頭中将忠顯朝臣を勅使あり長年より武勇の極く上聞
に達する同連子御迎子系上京都へ還幸乃計畧を施し
四海一統乃皇化を致しなるくす時を馮て仰らる旨を
述らむらう長年をうふ一族を集め酒宴しく居たりらるり
此由を承らる頭を傾け兎角の言申得さうける處ふ合
弟小太郎左衛門長重とて出くすけふ古より今に至る
弓矢取乃望みり各の各と理乃二行をさぐ我等亦かく
十善乃表らる憑られ奉る此大事を馳走したとて尸を軍門
に曝とも其名を万代に傳えんと生前乃思出死後の名
譽たるついた一助らるる定めくもや御迎子系らるる

計らひけふ列座の一族二十餘人しか此儀了同しけむ
長年ハ長重と共々湊へ御迎子系らるる自余の方ハ船上
へ取上り合戦乃用意あらるると云まらる鎧を穿る肩小
あけのけ御迎子系らるる俄乃こらる御乗あんと
儲も無里けむハ長重着る鎧の上より荒草を巻く表を
負進せぬらむくみ船との山坊へ入御あしなる
米子の城より出雲國能義郡八枚まう行程
二里の間の各和浦船と云あまらる
長年近邊の左家へ人を
走らき俄ら思立とありらる船上へ根米をよるなり我食子
あふとける米穀を二荷持運ひたらんものハ鳥目五百つ
とらとへしと觸たりぬハ十方より人夫數千人おまらる
芳りと持送る程ふ一日の間より根米ハ余石を運ひらる



信北圖

あゝ、世に
 うへへ
 とや
 名和長年
 後醍醐天皇
 賜
 秋

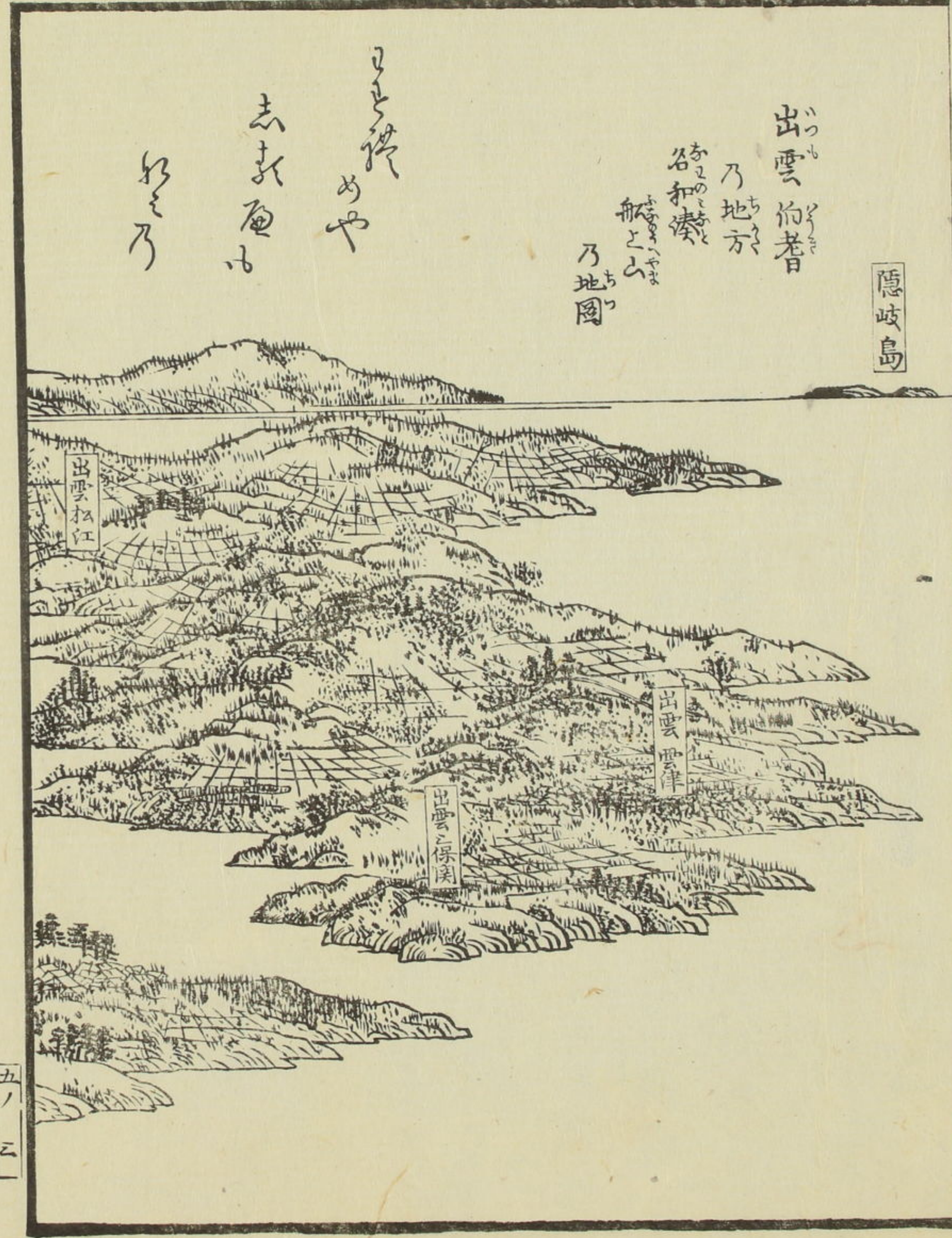
出雲八枝

船上

名和長年

伯耆米子

隱岐島



五ノ云

出雲伯耆
 乃地方
 名和長年
 乃地圖
 志新
 乃

出雲松江

出雲西條

出雲保田

此頃乃量ハ南都興福寺東金堂元亨二年乃升今京升
ル合六白三撮を容と大倭国一かるヘ々也ハ五千餘石ハ今
乃四千二百十八不餘了あくる口斗を俵と一萬七百
八十七俵余なり
二俵を一荷とくハハ二百九十三荷余なり
此運價ニハ六百九十六貫七百五十文あり長
年の富推 龍城乃兵百五十騎とソハふより人敷を討
量るへ
了凡七百五十人及ふ俵一 一騎五人とこの頃ハ積れる 七
百八十人あくる口斗二百十八不餘を食人子一子百五十餘日
を支ふ而く長年とつうハ名和莊乃地頭たり其富かくの
如し
残る金銀財寶々人丈百姓等ふ分ち興へ其後己ハ館子
火を掛く百五十騎乃兵を率一船上了馳登る皇居を守
如し

護かゝする長年一族同苗七郎と云志智勇たくありそもの
お里乃色ハ白布五百端ありけるを旗とあし松乃葉を焼く
烟了薰く近國諸武士乃家くの文を書いてけ乃本の軒彼乃
峯ふそ立置けるけ旗悉く峯乃嵐吹翻大勢乃山中ふ
馳某里たふと覺く敷く見へたりける去程了同月廿九日
仇本隱岐判官清高おかく弾正左衛門尉同佐渡前司その外
塩治判官高貞富士名判官義綱等を始く出雲伯耆
周防不見にケ國乃禁を催促くく子餘珍みく船と乃
南北より押寄ける此船乃上といふ此多大本子續きて
巖たたく崎ち之方ま嶮きく地僻にあり俄不捕たふ城
あまは、ま、堀乃一處ハ堀ら以弁乃一室ハ塗ましくた

所^{ところ}く^く大木^{おほき}少^{すく}く切倒^{きりたお}し^し逆^{さか}本^{もと}了^り引^ひ房舎^{ぶどう}の^の慶^{うらやま}を破^{やぶ}つ^つく搦^な
捕^と了^りき^き新計^{あらたけ}あり^{あり}寄手^{よきて}ハ^ハハ^ハ事^{こと}ハ^ハ見^み分^{わか}と^と坂^{さか}乃^の半^{かた}ま^まく責^{せめ}
上^{かみ}里^{さと}遙^{とほ}く^く率^{ひら}を向^{むか}ふ^ふは^は松^{まつ}柏^{かしわ}生^な茂^{さか}り^り日^ひ影^{かげ}お^お闇^{くら}き^き本^{もと}陰^{かげ}
よ^よ家^{いえ}く^く乃^の旗^{はた}に^に百^{ひゃく}流^{りゅう}を^を雲^{くも}る^る翻^{ひら}里^{さと}日^ひ小^こ暎^{あざ}し^しく^く見^みえ^えたり^り志^{こころ}ハ^ハ柳^{やなぎ}
ハ^ハや^や辺^へ國^{くに}乃^の者^{もの}と^と由^{よし}馳^ち集^{あつ}里^{さと}たり^りと^と賞^{あや}を^をそ^そろ^ろり^りけ^け惣^{そう}計^{けい}あり^{あり}責^{せめ}落^お
さん^{さん}ハ^ハ難^{かた}儀^ぎあり^{あり}と^と心^{こころ}を^をな^なく^く進^まる^るは^は後^ごを^を待^{まち}り^り日^ひを^を暮^く
け^けふ^ふ斯^すく^くハ^ハ果^はし^しと^と大^{おほ}手^て搦^な手^て一^{いつ}回^{まい}ハ^ハ南^{なん}北^{きた}乃^の路^ぢより^{より}責^{せめ}上^ある^る
城^{しろ}中^{ちゆう}より^{より}ハ^ハ勢^{せい}乃^の程^{ほど}を^を敵^{てき}く^く見^みり^りと^と本^{もと}の^の間^まく^くハ^ハ後^ご也^{なり}
仗^{たす}く^く散^{さん}く^く了^り了^り落^お矢^やう^うま^まを^を射^やたり^りけ^け也^{なり}搦^な手^て乃^の大^{たい}將^{しやう}佐^さハ^ハ本^{もと}
彈^{たま}正^{ただ}右^{みぎ}邊^へ射^やたり^り放^{はな}ち^ちと^と由^{よし}知^しら^らぬ^ぬ流^{りゅう}矢^やる^る右^{みぎ}の^の眼^{まなこ}より^{より}頭^{づつ}
惱^{うれ}を^をう^うけ^けく^く射^やぬ^ぬり^り也^{なり}と^とハ^ハ怪^{あや}ゆ^ゆあり^りと^と其^{その}倒^{たお}ふ^ふ馬^{うま}より^{より}落^おち^ち

出^いり^り也^{なり}

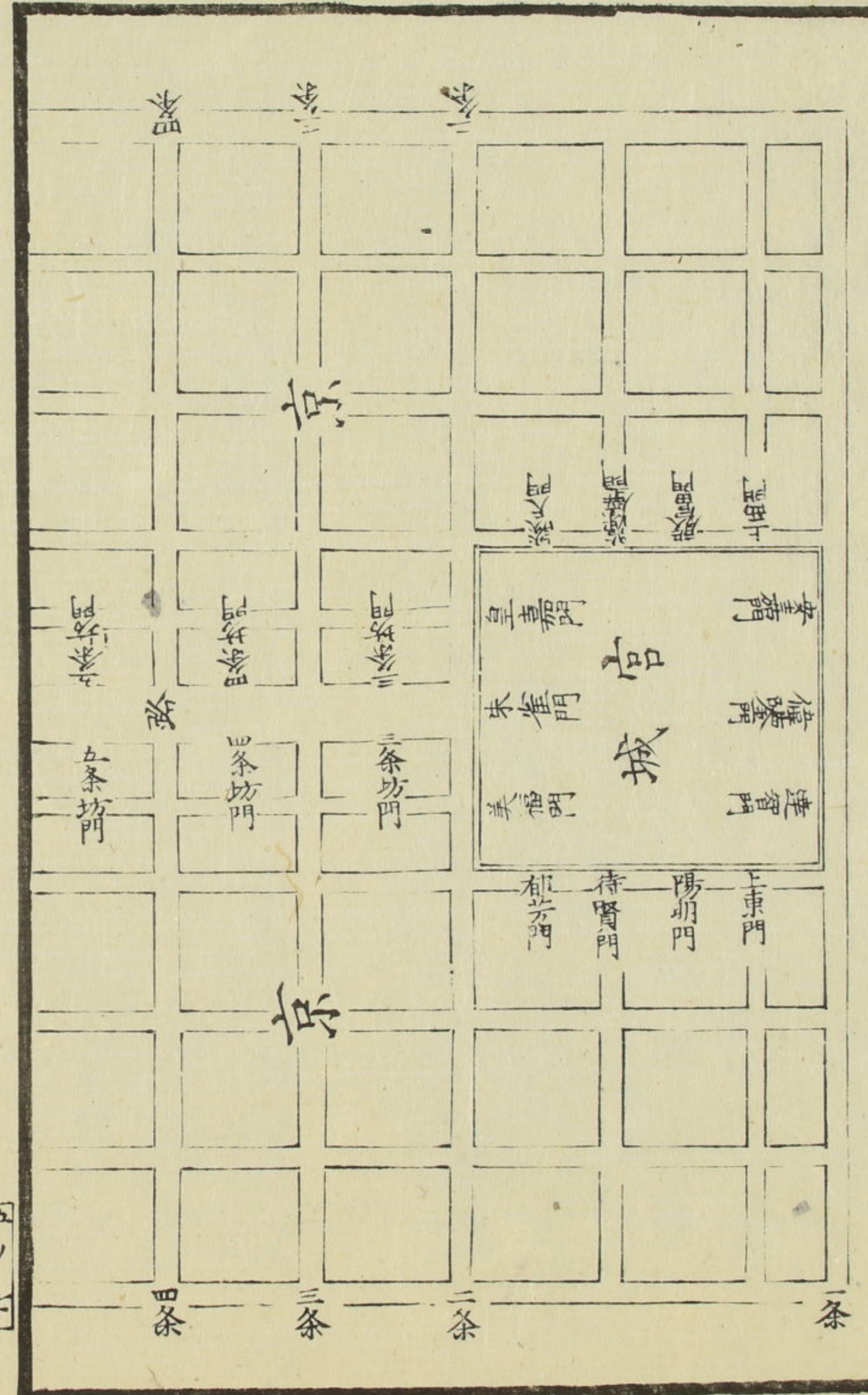
死^したり^りける^る其^{その}子^この^の兵^{へい}五^ご百^{ひゃく}余^よ騎^き大^{たい}將^{しやう}を^を討^うち^ちと^と色^{いろ}を^を失^うち^ちと^とハ^ハ
一^{いつ}戦^{せん}ふ^ふり^り及^{およ}び^び人^{ひと}引^ひ退^{たい}く^く佐^さ渡^{わた}前^{ぜん}司^しハ^ハ是^{これ}を^をま^まく^くハ^ハ百^{ひゃく}余^よ騎^きを^を引^ひ
分^{ぶん}く^く旗^{はた}を^を卷^ま甲^かを^を脱^だく^く城^{しろ}中^{ちゆう}へ^へ隊^{たい}を^を隠^{かく}岐^き判^{はん}官^{くわん}清^{せい}高^{かう}ハ^ハ搦^な
子^こ乃^の動^{どう}静^{せい}を^を憂^{うれ}ふ^ふ知^しる^る早^{はや}天^{てん}より^{より}押^お寄^よ一^{いつ}の^の本^{もと}戸^こは^はま^まく^く荒^あ
手^てを^を入^い替^かへ^へ責^{せめ}ま^ます^すハ^ハ城^{しろ}中^{ちゆう}より^{より}射^や手^てを^をま^まく^く射^や遠^{とほ}ふ^ふ
殺^{ころ}ふ^ふハ^ハ果^は愈^いし^しと^と見^みへ^へさ^さる^る日^ひ西^{にし}り^り傾^かく^くあり^り一^{いつ}天^{てん}俄^が
々^々と^と時^{とき}た^たぬ^ぬ雷^{らい}鳴^なる^ると^とめ^めき^き山^{さん}谷^こを^を轟^{とどろ}く^く風^{かぜ}吹^ふ落^おさ^さと^と
箭^や乃^の如^{ごと}く^く雨^{あめ}乃^の下^{くだ}り^り車^{くるま}軸^{じく}ハ^ハ漂^たら^らん^んハ^ハ一^{いつ}頃^{ころ}世^よ乃^の中^{ちゆう}穏^{おん}く^く
戦^{いくさ}の^の場^ばを^を乃^のと^と稀^{まれ}なる^るもの^{もの}多^{おほ}う^うり^りハ^ハこの^{この}雨^{あめ}風^{かぜ}を^を面^{おも}
み^みま^まく^く眼^{まなこ}暗^{くら}手^て足^{あし}あ^あら^らえ^えく^く働^{はたら}き^きゆ^ゆと^と木^き落^おち^ちノ^ノハ^ハ不^ふ立^たち^ちて^て暫^{しば}
く^く雨^{あめ}風^{かぜ}を^を凌^{しの}ぐ^ぐん^んと^と三^{さん}騷^{さわ}く^く長^{なが}年^{ねん}是^{これ}を^を見^みく^く射^や手^てを^を左^{ひだり}右^{みぎ}に^に

進め散らさずおぼく先據乃端のゆるく知をゆるく也賢く
と長年を始め金身不た身在場射長重おあしく小を即
長成その外一類後卒ふか抜つてく率を下り鋒をさうへ
て責う後ハ大手乃寄手ハ百余人谷底へ暮おとされ衆
お挫りて下頭をくたさ己り持て取大刀了喉を貫ぬりて
く死する去敷をうらと可取如不清高う後陣了備えく入
替り合戦をよ志以愈く頼きく憑る塩浪富士衣朝公
合持黨元より官軍う志をいよと勢か多色は周をゆるく
浪高う切くつる清高う手の志周章色めく一支由まは
本國きく引退く塩浪富士衣子く責以けりハ浪高
僅し之十七騎よおあされ船了る乃里隠岐島へゆりける

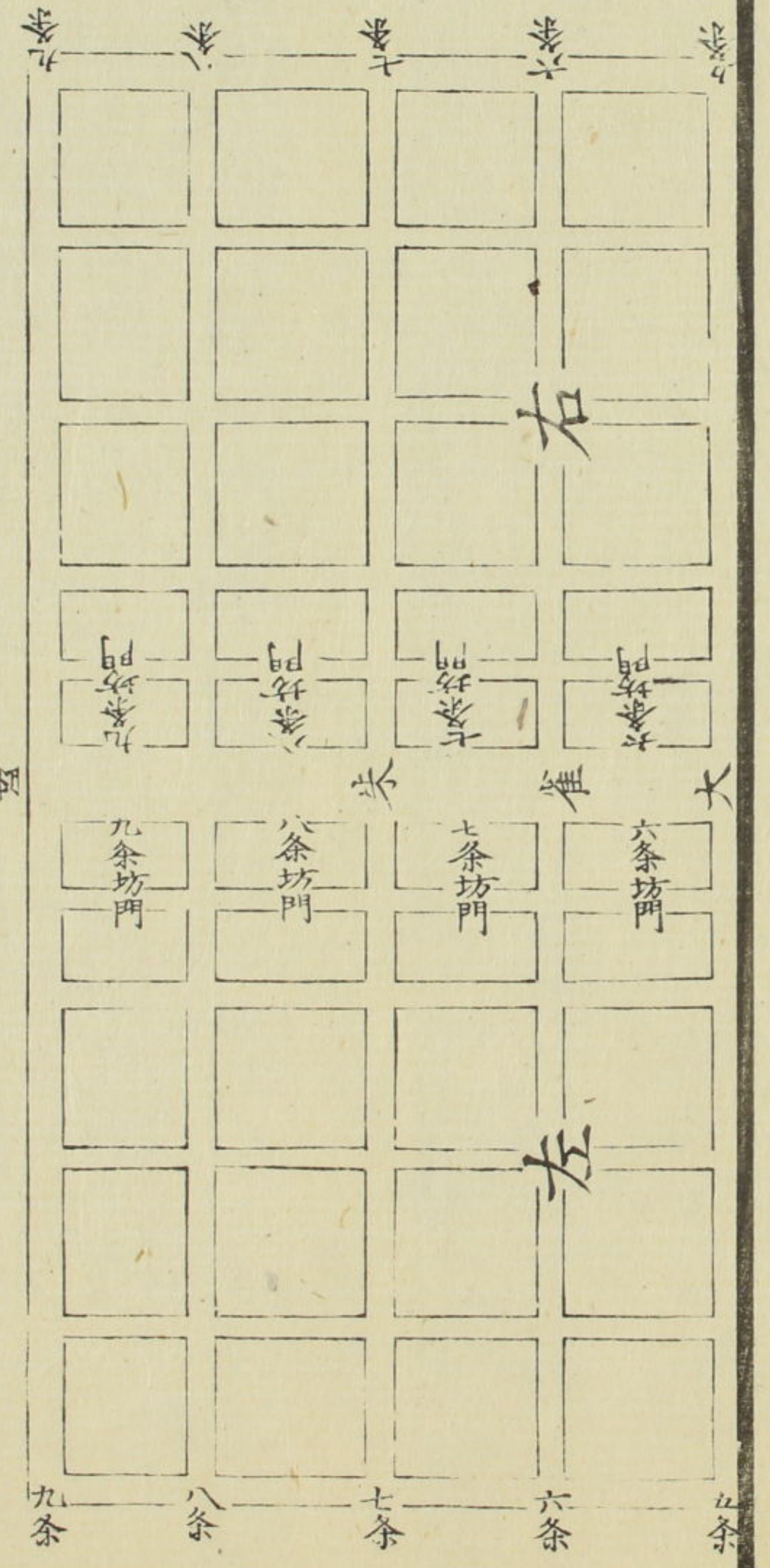
長年初乃軍了打勝りハ因幡伯耆出雲之ヶ國乃同小
弓矢子推こ取不との者のまらぬハ無りけりあま併り長年
ハ戦功ふよ里定しく勳賞あふるく長年左衛門尉了補
とらさ伯耆守了任とら取
令義解官位令了衛門督 左右衛士督正五位三階とあり
職負令了衛門府ハ諸門禁衛出入乃礼儀時を以て巡檢
志及ハ隼人門藉 人乃名をのき 門勝 物乃負敷を去り 今の還り状あり の事
と掌るといひ左右衛士府ハ宮掖 西門の傍乃小門を禁衛
隊仗を檢校し時を以て巡檢し車駕出入乃前駆後殿乃
一とを掌るといひ左右兵衛府ハ同門子分配しといふ是を
熟考さるふ諸門ハ宮門京城門を總て統し同門ハ

左右京圖 左右衛門府當直門圖

東西一千五百八丈 今四十一町五十三間二尺



五ノ七



南北一千七百五十三丈 今四十八町四十一間四尺

羅城門 朱雀門 偉鑿門 左右衛門共了守る
 此外 朱雀大路を中台 左京 左衛門 右京 右衛門
 大連を守る

内中小門を云とありハ長安永安門等を云と志は
固と合 然る時ハ九衛門府乃當直乃門を羅城門 左系の
坊門 二系 四系 八系 六系 七系 朱雀門 美福門 柳芳
門 待賢門 陽明門 上東門 達智門 偉登門等の
十六門を云と由まて藩をまき以職原抄ハ左衛門尉
顯官也仍六位諸大夫并侍尤其仁を擇入登一近代を
沙汰了及ハ無念と謂念一と足狂た一ハ頃ハ里内裡
一ハ宮城門由令く満よりハ羅城門を存と云と
ハ左右衛門府乃當直ハ絶く久くありぬと云ハ當
時乃官職もとハ職負令了ハ合ぬと知へハ伯耆守ハ
伯耆乃國司子補任せらる一好りこの頃ハ一國ハ

國司と守護と二職を置建國司を職負令入云と祠
社祠ハ天神を云家數ハ人別簿帳より百姓を字表良
農桑を勸課するを掌る好り守護ハ盜賊追捕を
主と云
長年と云ハ長高と名乗里けるハ長く高きハ危一との勅定
みく今乃名不改くハ是年六月七日六波羅乃仲時時益赤
松圓心ハ種忠顯朝臣等乃たより攻破らむと東國を
落ゆける時益赤ハ流矢子ありと命をおとハ仲時
ハ自害一ハ失けるハ一船上へまき一ハ一都へ還幸あ
るハ一ハ仰出せける時ハ長年をよハ勘解由次官老守
承久乃先飛了依と考ふるハ六波羅ハたをまき攻落すと

此と申強倉乃安危いすく治ませある間ハ程けふ御返り
あまへきう奏聞しけさハ上清自身周易を以て清上盤
を考へき勢らりし師乃上六を治せらるりかは丈人上六
ふくむ啓ふといへし還幸行乃支障りありんとおり定め
らして六月廿二日船を發せらるり長年兼劍し風
聲乃清あり供まよと

還幸乃清通船陽道と足程は船より米子へ至る
七里より一里溝にり二里二部二里板
尾系二里新衣一里鴨二里言田一里久勢二里壺井二里
津山二里勝間田四里大井二里佐用二里米子二日月不至る
程凡之拾五里す二日月より書寫山へ至る二里不迫し今

廿二日船を發ありと廿七日書寫山へ臨幸と云
ハ一日凡六里許の乃御行程あり
車ハ二十里とあり一里ハ今の四町十間より七十里ハ今
の八里と町は十間より五十里ハ今の五里廿八町ハ破
る
廿八日法華山臨幸と云この道凡七八里了おし
ム、撒那 晦日兵庫へ還幸ありと醫王山藥仏寺不入
加茂郡 廿九日乃御旅宿いす考へハ 藥仏寺を天平年中
基菩薩乃建玉本宮阿弥陀佛を聖徳太子乃作化と云
本堂乃後了稽文旨稽首薰厥刻乃觀音堂あり堂の東
不靈泉あり相傳ハ後醍醐天皇崩山へ臨幸ありける時
御不豫あり湯を依りて靈泉を汲り御藥を調進し
予不愈序平愈ありハ藥仏寺乃号を給ふといゆる

伯耆守長年朝臣真蹟

柳菴珍襲

長年朝臣ちかねのあそみ元弘三年げんこう閏二月廿九日あそみ船工ふねのこ合あは我乃賞うらなとく二月
左衛門尉さゑもんゑい了補りょうほ伯耆守伯耆のさし不任ふにん還幸えんさう不供奉ふくほう建武元年けんぶ春はる因幡いんぱん
伯耆乃守護職伯耆のさしごころたる日ひ伯耆守伯耆のさしを子息こゝろ義高よしたか譲ゆづりし中なかつ系圖けいず不見也

伯耆守
長年朝臣
真蹟

伯耆守
長年朝臣
真蹟

一
 海峽
 國

元弘三年七月郁芳門の沙汰所乃上卿九条民於光徑卿寄人の楠正敏
 和長年たり如意王の御下詳しうあつされし由駿河國司より勲功を公上
 せを沙汰所より糺彈ありて案堵を給へり故に國宣の依の文
 ありと知へり
 此書翰の裏に眞家宗辨を書たり
 故に紙乃上下を裁切ありと知へり

六月四日兵庫より東寺入りせらば五日二条富小路の
内裏へ供奉乃儀式を刷ハきり終く入所す爾一七日冷泉
萬里小路乃内裏へ還幸ありぬかく郁芳門乃左官了沙
汰所を置く九條民部卿光徑卿を上卿と一又畿七道乃
万機を沙汰せりも官軍勲功乃勸賞するもハ楠正成と
長年とを以て奉り定めらば一ハ長年在國一國
務を以てとありて一依て子息義高を奉り伯耆守と一
本國より還らしめ長年ハ京都に住せり形り
或云西洞院の六條
坊門に住せりと云
今五條通より西洞院ハ幡丁建武元年中興乃帝業官軍後忠乃
布屋明かとり魚とや
致すとありえより優劣を論と教り違ふとい魚とハ長
年乃船上り迎へし甲一忠切拔群ありと一因幡伯耆乃

守護職とあされ舎弟長重長生等をとり一後門葉に至る
程く了繁昌と一併ふ他乃身目を教馬とせり建武二
年六月西園寺公宗謀叛乃同ありけるふより公孫不むへと由
長年と中院定平と一仰らむ一ハ長年定平二子餘流みく
北山乃亭へおしよせ公宗以下乃凶徒を追捕し罪乃首從
を以て公宗を以て雲團へ流しけりて公孫長年
不復さず長年公孫を待たんと定め定平乃家子幼向ひ
中門乃前みく輿り乘んとせり公孫を長年警の髪を以
て引ぬを腰刀を抜く首を斬断と叫びて後子公宗與力の
等時幼相摸時兼等東國へ逃下り旗を奉りハ是
と征伐ありと一是利宰相當氏を東國へ戻りせり

上尊氏たかしらも朝憲あさのりを忽たちに慥たしかに殺ころす乃すなはち沙汰さたありけるふより新田
左中將さちゆうしやう義貞ぎしん朝臣あそみ了りやう節刀せつたうを切きりて誅罰しゆばつせらるるため東山
へ後向ごかうき後のちを長年ちやうねん正成せいせい二人ふたりを以もつて京都きやうとの守護しゆごするハ
かさねあり後のちも不義貞ふぎしん朝臣あそみ合戦あつせん利りなく尊氏たかしら勝かちみのりて上
谷うと新田しんた一同いどうをいは長年ちやうねん小勢多せうた橋はしを固かめりて尊氏たかしらを待まち
まうはる赤松あかつら圓心えんしん久下くげ時重ときしゆう等ら尊氏たかしらと與よりて山陰さんいん山陽さんやう
兩道りやうだうより京都きやうとを襲おそふんとせしにす後醍醐ごたいご天皇てんかう山門さんもんへ降くだり
ありけり同いどうく長年ちやうねん勢多せうたよりまゝ東坂とうさか本ほんへ馳かまらんとの
點ちちりり安やすらうる道みちと由よし今いまて内裡ないぢりへ歸かへり来きりて後
乃すなはち喇らあまゝとて三百餘さんひやくじゆ騎きをり具ぐて京きやうへ引ひけり
建武三年けんぶしやう正月十日しちがつじふにち悪日あくひちとて尊氏たかしらいさく入洛いらくせりつ是共このとも

に西國さいこく乃すなはち兵數へいすう万騎まんき京白川きやうはくがわを充滿じゆんぷんたるハ帆ふり舟ふね乃すなはち
印いんを以もつてあつりて不ふ避ひり打うちとれんとしけりとも長年ちやうねんうち
破やぶりて十七夜しちやまゝ戦たたかふとて百餘ひやくじゆ騎き乃すなはち勢次弟せうじだいくふ子こ負ひ
討うちつゝ内裏ないぢりの置石おきいし乃すなはち多たくはりて百餘ひやくじゆ騎き乃すなはち不ふありたり
あつり馬うまを乗のりたり南廷なんていより馳かつて見み多たくはりて甲かし人ひと共ども
礼れいを以もつて入いりて不ふ買かひ乃すなはち歩障子しよぢやうし非ひお平へい乃すなはち垂簾すいせん如ごとく引ひ
ちりて一い度ど長ちやう礼れい儀ぎを以もつて正ただしきりて第衣だいゐ教かうふ子こ乃すなはち宮女みやうによ老らう婆はを
糝せんひり弘こう織お敬かう小せう月げつ乃すなはち金かね鉤かぎむありて雲うん臺たい乃すなはち畫え圖と後
ハ不ふ破やぶり長年ちやうねんあまを以もつて洞あなを兩眼りやうがんするハ鏡かがみの被かをそ
ぬりけりあつりて休やすりて居ゐりける敵てき乃すなはち時とき乃すなはち寺てら間ま近ぢ
く聞きえけりハ陽明門やうめいもん乃すなはち前まへより馬うまより打うちのり北きた白しろ江えを今いま送おく送おく

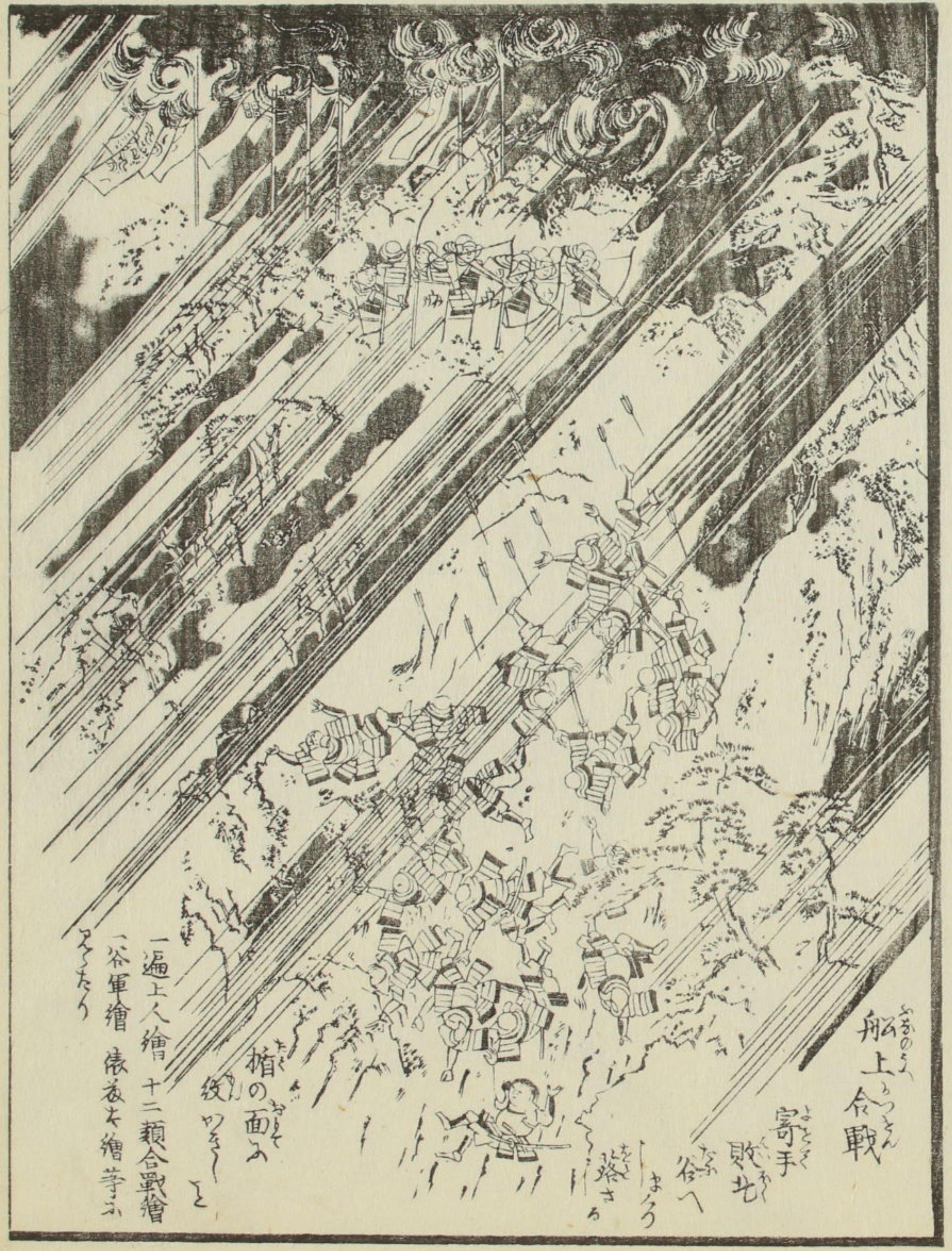
東坂本へそ来りけり不甲斐依懐乃官軍奥討乃國
司張家や大軍を起し東坂本へ来りては八京都へ押
寄く高氏直義を誅伐有へし正月廿七日乃宵より長年
正成結城入るに子餘跡あり西坂を下りて松本陣をとる
明也ハ長年等亂の森より今出川へ押寄り火をくす
烟乃下り斬り廻りしれと高氏遂に打負く松津五へ
落りりか杉本仇人九列へおぼろなるをかく都下敵
一人もかくけりしハ高氏還幸ありしとゆきしゆりしに
大内が正月十日乃兵火不罹く空しく礎石のを遺るる不依く
花山院を以て皇居とふされたり
異執事平記に長年内裏を巡り
の秘跡を平記に載せしを難く放たしと云
細川定禪乃燒たるなり 然るふ二月高氏九列乃軍兵を後

て襲ひ上るす中國乃早馬志を波を打て告ありしハ
みく討留む危きとの宣言ふより義貞羽長ハ中國へ進發し
楠判官正成ハ兵庫へ下向し義貞羽長ハ合世長年ハ
京都に留めらせけるふ義貞朝長軍志むく利を失ふハ正成
湊川みく討死し尊氏もく小畿内へ入ると別しめさし廿七
日ありしハ門へ臨幸あり六月七日高氏ハ兵西坂を襲
ふ子種宰相忠顯あをを防ぎ戦ひ破るく打死をおあり
八日高氏ハ兵東坂を襲ふ長年昭屋義助と共におもて城
白多越り防り追ひてをけり合戦たひくありく勝負ハ
互に午角ありけりは同一く晦日義貞朝長高氏乃東寺の
陣へ押寄り箭一射去すくハ歸らしと誓く打たせけ

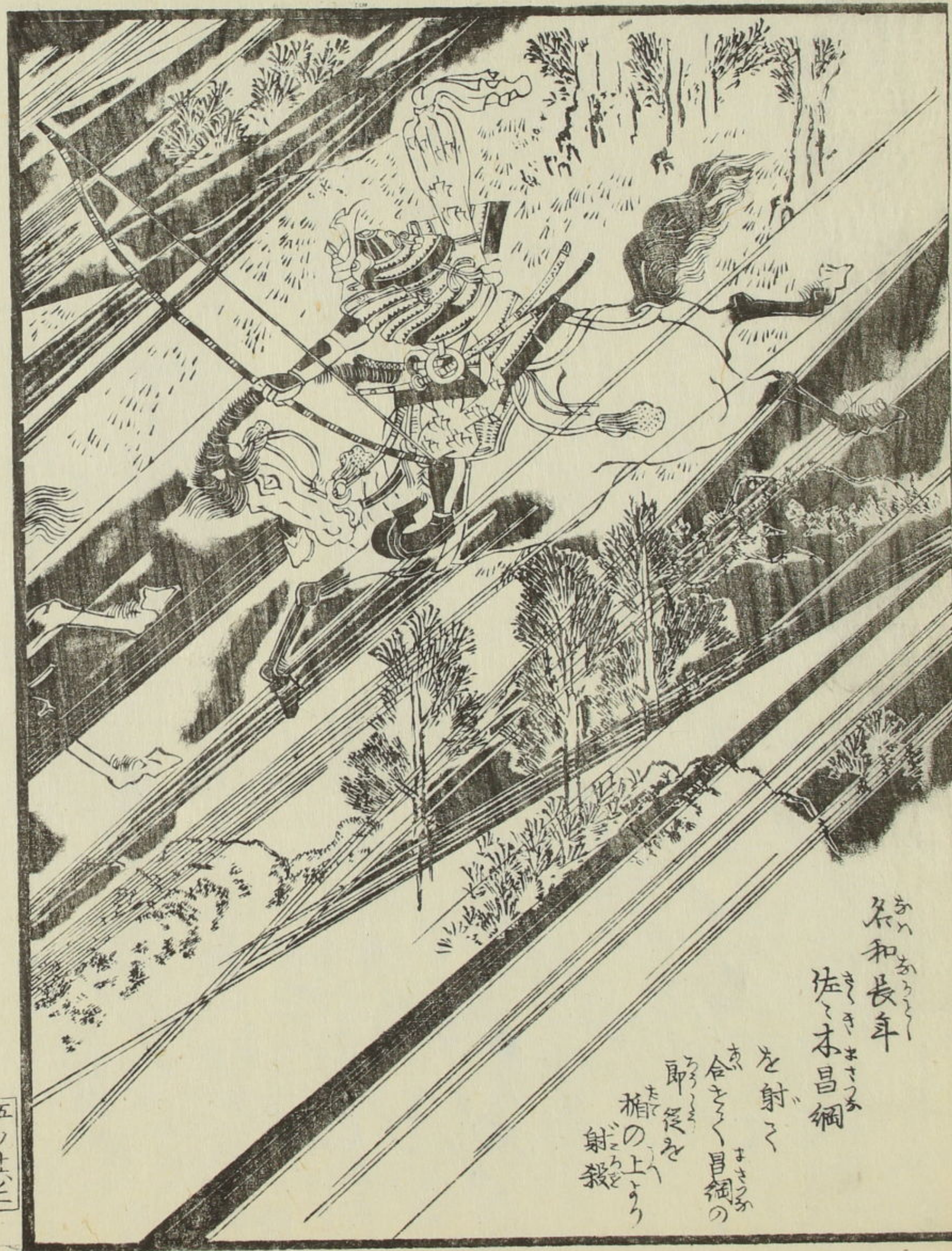
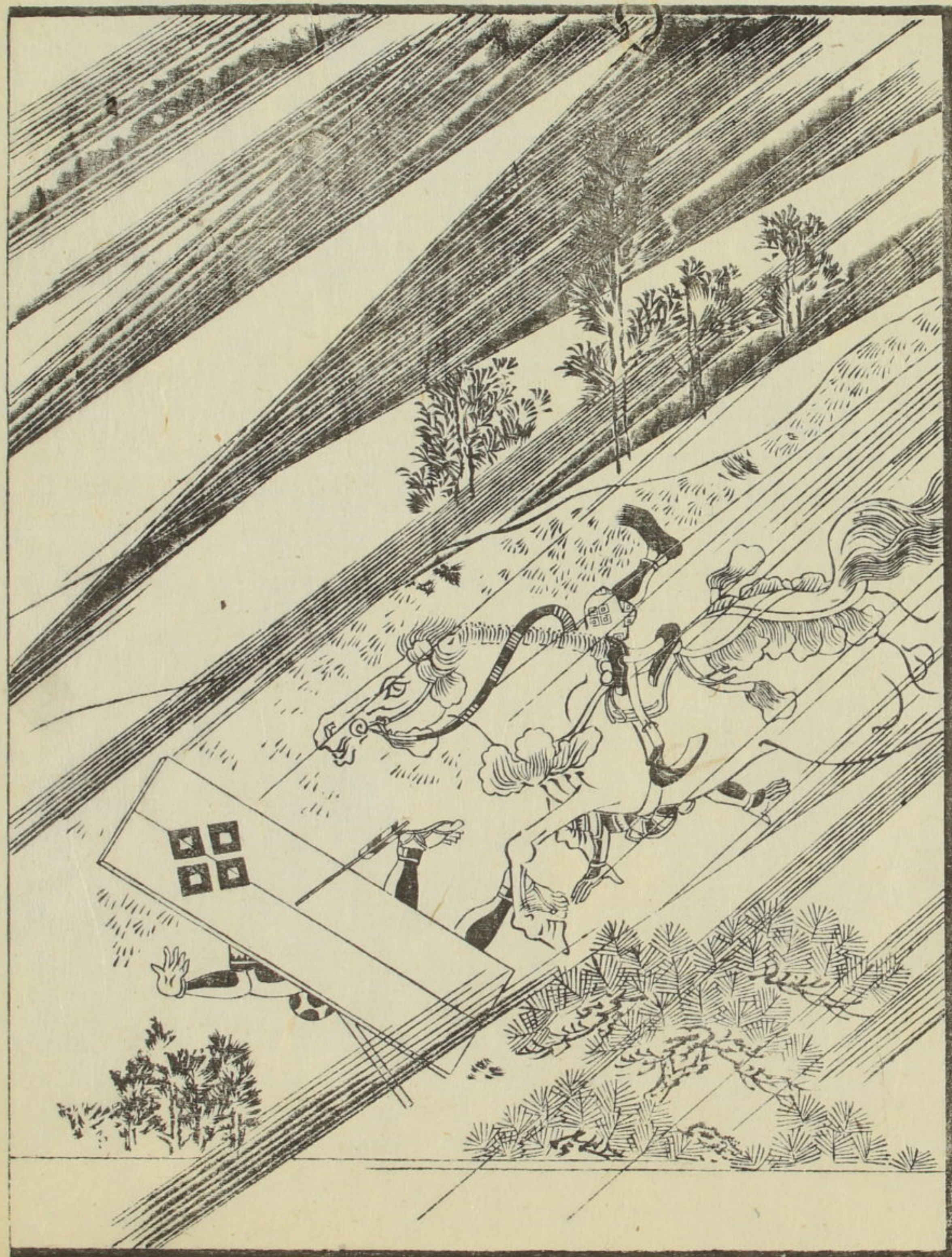
此ハ長年小園こゝろ一打うち立たて白鳥しらとり乃すなはち花はなをよけるとき見物けんぶつ
 ける女をんな童こどもこの澳あ天下あめふもと木き
楠 結城ゆきぎ伯耆はくしよ皆みな文字あざな一いち条じょうあり
あるを以ておふ通ひきり あり
 といふれくる人ひと乃すなはち人ひとハ打うち死しし伯耆はくしよ一人ひとりのころたることよ
結城親老ハ正月十一日亥ふく討死し楠正成ハ五月廿六日
と云けるを 駿川すまがわふく打うち死しし種たね名な義郷ぎきょうハ六月七日西坂にしざかあり打
死 ころり同どうくく長年ながねん今いま打うち死しせぬをいハ
を以て 此こゝ人ひと乃すなはち汝なはれハ女をんな童こどもをいハ今日けふ乃
軍 味あじ方かたも討うち負ま一人ひとりありとも引ひ留とどめ付つ死しせんと思おも定さだて
猪熊 熊くまをとりお押おし寄よけりお追お手て搦なめ合あ園えん相あ遠とほし義貞ぎじん朝
乃 乃すなはち二ふた万余よろ騎き乃すなはち東あづま寺てらへ馳か向むかひ八やち条じょう九く条じょうお扱お扱
たる敵 敵てき十じゆ万まん余よ騎きと我われ々々三さん条じょう河か系けいへさると引ひ長年ながねん終
る味 味あじ方かたありを隔へり也なり二ふた百ひゃく餘よ騎きを一手ひとてお扱お扱扱大宮おほみや乃すなはち一いち条じょう

あり我われとらうり乃すなはち木き戸とをさ一人ひとりも残のこらと死しけり長年ながねん
今年 今いま年ねんに十じゆ八はち歳さいとハ也なり
一 説せつ了りょうハに十七じゆ歳さいと一いち歳さいハ又また十
に十八 十じゆ八はち歳さい 嫡ちやく子し伯耆はくしよ守まもり義高ぎたか次つぎ男おとこ基長もとなが三さん男おとこ高たか光みつをのの野の
ふ傳 傳でんあり
京城 京きやう城じやう圖と乃すなはち依より考かんへる一いち条じょう乃すなはち大宮おほみやと云いハ大内おほうち乃すなはち東
北 北きた乃すなはち隅ぐもふ市いち乃すなはち大宮おほみや大路おほぢ廣ひろさ十二じふ丈ぢやうと式しき見み地ぢ今いま乃
町 町ちやう法はふあり廿に間かん乃すなはち路ぢ乃すなはち一いち条じょう乃すなはち大路おほぢハ廣ひろさ十じゆ丈ぢやうと云
今 今いま乃すなはち十六じゆ間かん乃すなはち路ぢ乃すなはち京きやう都と繪え圖と乃すなはち引ひ留とどめくさる堀川ほりがわ
乃 乃すなはち廣ひろ六む間かん半はん餘よあり也なりハ即すなはちむり乃すなはち四し丈ぢやうとあり敷しきれり乃すなはち西
小 小こ半はん町ちやう乃すなはち街まち四し川がわ小こ路ぢ四し川がわ乃すなはち凡およ百ひゃく四し十じゆ三さん間かんを過すく大
宮 宮みや乃すなはち梨り本ほん町ちやう乃すなはち西にし小こ乃すなはち今いま町ちやう屋や乃すなはちありたる

あくろ大宮大衆十二丈乃内なるへけさハ長年乃戦死也
 云乃地おろへー長年并死し〜天保壬寅了多々又百七
 年よ忠誠義氣を日月とわふ光りを増といふと
 其乃身體終焉乃地埋滅し〜知人か〜豈かあり〜
 や余薄遊を甘ん〜東海東山乃道を過ると凡そ八廻
 蕉箱乃句碑を建るものを見〜年くお不〜一吟一
 詠をそ乃子弟了在〜胸懐了蓄入ると能く吟是
 と貞砥不勒し〜不朽を〜か不追遠乃志あり〜と云
 魚〜其也家を被く王事不従ひ身を殺し〜私愛を顧
 以境了臨〜時了感せ〜吟詠了以是進い何ぞ但骨壤
 乃差からんや



船上合戦
 寄手
 敗北
 谷へ
 榎の面
 紋
 一面上人繪 十二類合戦繪
 一谷軍繪 儀表大繪等
 二二二

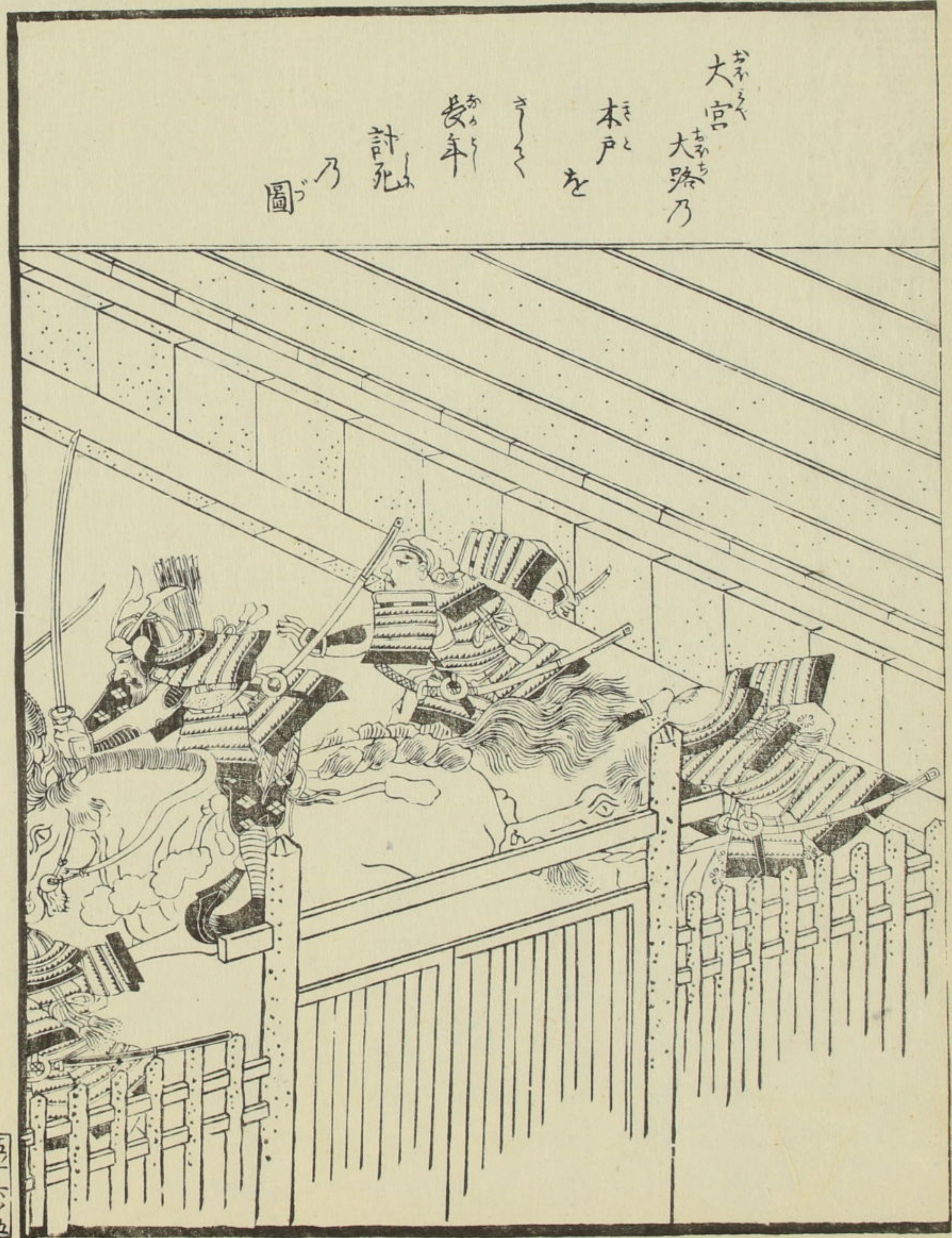
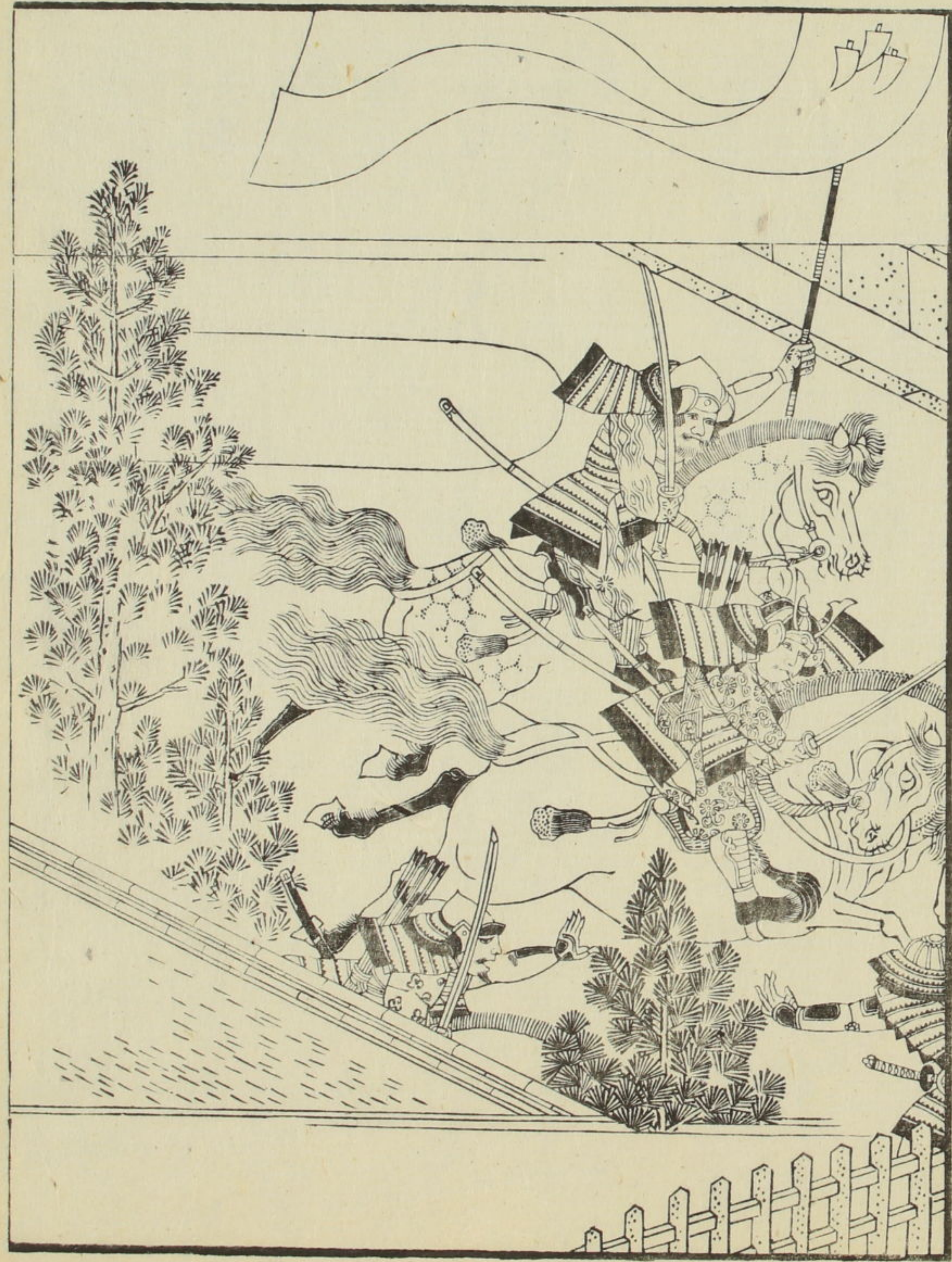


名和長年
佐々木昌綱

を射く
合さく冒細の
即後を
楯の上より
射殺

承久元年七月十二日大内守護乃馬頭源賴茂源三
政四男源藏人火を放く大内を焼く所見ハ仁孝殿了位
頼兼乃長男頼茂放火の事ハ後ハく程由なく後鳥羽
入る腹切後乃信ふくハ後ハく程由なく後鳥羽
大内門順徳乃之院畿外ハ遷幸ありハハ大内ハ
院内裏を皇居とし大内ハ次第ハ荒蕪とせし由
理乃沙汰及く所ハ之を建武元年正月十二日安藝
周防の両國ハ課せし新造出さす百十六年乃間
廢頽及く及る宮教及くめ及く延暦の舊觀ハ復せしハ一
朝の春夢と共く破れんとせ及く見と各和長年乃
純忠義膽ハ及く哀れと思ハくハ樓違と及く去不
いとハ抑人乃良心形ハ及く細川定禪及く及く

火を放く宮闕を燒く何乃為そやむハ楚之項羽と
漢乃高祖と共く秦を攻た及く高祖及く咸陽ハ及く
秦の宮教樓閣乃廣大及く及く民力を竭き及く傷
之項羽のち不本及く及くを燒そ乃心我智と及く及く
人乃為不有と及く及くを嫉む及く及く定禪乃大内を燒
項羽乃咸陽を焚たると其意同く及く及く定禪乃心
神器を窺ふ及く及く不長乃甚及く及く罪誅を遁及く及く
處及くと云及く及く皇居ハ累代乃皇居なり及く及く四海乃
民乃膏血と及く及くを竭及く及く及く新造乃大内及く
是を焚燬及く及く及く及く民を憐及く及く及く心及く
云ハ及く及く及く及く及く及く及く及く及く及く及く



大宮 大踏乃
 本戸 を
 長年
 計死
 乃 圖

長年朝臣妻を内河右頼女あながちあそんに伯耆大夫判官義高あきひらの
 郎あきひら九衛門基長もとなが等の母あり長年朝臣船工ふねのうより基長もとながを使つかひ
 女性おんなハ何いづ方かたへ申まをひ日ひへ館たちふハ火ひをかけ焼や拂はらへとあり一時
 内河氏うちがわ宣のたまひ乃ゆ我われハ弓ゆみや箭やとり乃ゆりるこふ合あんこ兼かねくおひ
 儲たくわへとあり其妻そのつととくいつくへ立たち忍しのへへ早はや館たちふ火ひを
 かけ玉たまへ飛と入いり見み苦くる友とも事ことを人ひと々の足あしさくと潔いさぎよく足あしを
 走はは基長もとなが乃ゆ妻つとにおおしく大方おほく教をを以もて内河氏うちがわいふ小こ成なりをおと
 志しまきば一いつ所ところありとゆやくおとんと思おも切きくつとふ付つ居ゐ
 たりとかや谷や和わ氏し一家いっけふ義夫ぎふ烈女れつにょを聚あつめると云いへ幸さいか
 る外ほか基長もとながの乳母ちちのと男おとこ夜よ三さん郎らう逆清さかきよありと死しハ一いつ旦たんふと安やすし
 と云いふ徳とくく船工ふねのうふ登のぼりて生せいを全ぜんくきと一いつ

兼好法師壽像

雙岡長泉寺藏



兼好法師ハ天兒屋根命卅九代後日位下右京大夫卜部
宿祿兼各乃長子兼顯の三男形り兄を大僧正慈遍と云
南朝の伺候し神風和記三卷を記せり 櫻雲記の興隆元年
次ハ後六位上民部大卿兼雄形り兼好弘安八年壬申乃
歳誕生あり 或云弘安六年幼けあふ 才りこく親了事
中つふ志あつく人を惹くふふ風雅乃道ハ彼香公乃孫
を慕ひ和歌乃浦波の心を以て頓阿淨辨慶運と名を
齊しくして四天王と稱せらる馬乃益云推乃たり堪能
あつて一ハ寂庵光院乃邊あつ馬を馳し男乃落んと以
るをいふかと 徳然草自讚的の向入りり海矢子捷むす
此則た論き 同五九とく知念一後宇多院乃北面小僧

せとく九兵衛佐り補きり也後日位より叙せ弘安十年後宇
多院讓位あつて伏見院位より即をさす傳つ事と小大少事
後宇多院乃仙洞あつてありけり是ころ時内裏ハ冷泉
万里小照教とく大御門院乃所なり ハ後嵯峨院不
傳りて終る事乃内裏あり 今ハ庚申乃北入
柳馬場の五町め堀町通り さぬを町高倉 仙洞を常盤井殿と云
ふくを町乃東が一町乃と云る形り 仙洞を常盤井殿と云
大炊御門京極形り 今乃寺町通り下御前丁大炊 兼好ハ位
洞系ははまつて 此乃堀一町四方乃地なり 兼好ハ位
後渡教乃方より最妍協かぶ女房乃色殊 之十七歳 艶りたる衣
まき肩類つき美しく髪ゆりくと長く 一と云ふ乃ゆいけ
ちせば月とゆる心地 見おくりぬ像を人り同ハ中宮

乃御使^{みかどつかひ}了^{しま}糸^{いと}工^こ人^{ひと}了^{しま}と云^いその後^{のち}そは休^{やすみ}乃^{すなは}急^{いそ}くく
又^{また}はる^{はる}の^の好^{この}く^く相^{あひ}見^みく^くさふ^{さふ}と^とる^る居^いく^く長^{なが}日^ひた^たる^る隊^{たい}つ^つ也^や
乃^{すなは}豊^{とよ}と^と我^{われ}た^たの^のひ^ひも^もや^やま^まく^くへ^へか^かま^ます
隊^{たい}を^を子^こ逆^{さか}あ^あそ^そか^かま^まれ^れう^う乃^{すなは}出^で祈^{いのり}ふ^ふか^かく^くた^たり^り入^いる^る
と^とか^かけ^けき^きわ^わら^らし^しふ^ふく^くや^や露^{つゆ}と^とく^く物^{もの}を^をお^おり^り入^いり^りと^と同^{どう}人^{ひと}あ^あり
娘^{むすめ}一^{ひと}さ^さふ^ふ其^{その}お^おり^りの^の仲^{なつ}を^をい^いひ^ひ出^でせ^せい^いそれ^{それ}ふ^ふん^ん伊^い賀^が守^{まも}り^り橋^{はし}成^{なり}志^し
乃^{すなは}む^むさ^さめ^めふ^ふく^く中^{ちゆう}宮^{ぐう}乃^{すなは}小^{せう}辨^{べん}ふ^ふく^くあ^あそ^そあ^あき^きと^と云^いを^をた^たの^のこ
か^かち^ちく^く居^いる^る乃^{すなは}聲^{こゑ}と^とく^くと^とり^り乃^{すなは}契^{しぎ}ふ^ふく^くも^も願^{ねが}ふ^ふく^く
剛^{ごう}く^くさ^さそ^そお^おと^とり^りの^の建^{たて}ぬ^ぬ也^や乃^{すなは}心^{こゝろ}も^も待^{まち}へ^へう^うけ^ける^る當^{あた}の^の一^{ひと}糸^{いと}
哀^{あは}れ^れと^とハ^ハ夢^{ゆめ}を^をぬ^ぬく^くや^やと^と云^いハ^ハい^いぎ^ぎて^て云^いを^を傳^{つた}へ^へる^る
と^と云^いる^るあ^あま^まえ^えく^く打^{うち}出^だん^ん云^い乃^{すなは}紫^{むらさ}も^もか^かい

志^{こころ}す^す勢^{いきほ}も^もや^や木^{この}葉^はの^のれ^れ乃^{すなは}埋^うむ^む水^{みづ}下^{した}ふ^ふか^かり^りも^もく^く絶^たぬ^ぬん^んた
と^とま^まり^り好^{この}く^く乃^{すなは}く^く云^い初^{はつ}く^く日^ひ敷^{しき}あ^あと^とも^もい^いか^かと^とも^もか^かい
た^たの^のめ^め人^{ひと}と^とか^かい^いく^く
か^かう^うく^くい^いひ^ひを^をう^うと^とり^りふ^ふ白^{しろ}ま^まさ^さう^うお^おき^きふ^ふ過^{とく}を^を月^{つき}日^ひ成^{なり}らん
と^と恨^{うら}ま^まか^かあ^あち^ちと^と偏^{ひとへ}ふ^ふい^いま^まか^かけ^けぬ^ぬハ^ハ夏^{なつ}乃^{すなは}夕^{ゆふ}の^のこ
飛^とび^びく^くる^るさ^さく^く昔^{むかし}ま^まさ^さぬ^ぬ井^いより^{より}引^ひく^くハ^ハ杖^{つゑ}と^と風^{かぜ}や^やふ^ふらん
野^のお^おり^りの^の晴^はれ^れを^を由^{よし}乃^{すなは}か^かけ^けぬ^ぬハ^ハ祈^{いのり}也^や共^{とも}排^{はい}さ^さへ^へ交^{まじ}給^{たま}を^をぬ^ぬや^やと
ま^まま^まち^ちさ^さく^く排^{はい}乃^{すなは}之^{この}室^{むろ}の^の排^{はい}葉^はの^のか^かく^くぬ^ぬ色^{いろ}ハ^ハ門^{かど}ら^らさ^さ成^{なり}り
乃^{すなは}敷^{しき}あ^あぬ^ぬを^をい^いと^とほ^ほく^くか^かと^と結^{むす}く^くさ^さん^んら^らあ^あそ
ま^まり^り好^{この}く^くや^やい^いと^とほ^ほく^く乃^{すなは}命^{いのち}も^もあ^あ入^いり^りか^か魚^{いさな}んと^と頼^{たの}む^む計^{はかり}ハ
ん^ん乃^{すなは}闇^{やみ}を^をと^とハ^ハぬ^ぬも^もほ^ほら^らさ^さぬ^ぬハ

物おもしろき名やよきふ豆ぬらん今ハ波をと人ハおかし
 かくいひくまむハ女ハ衣本ふしもあはぬハ遊んといふか
 へきまのりもきりけるよやさもあはく月五日たちをれハ
 ぬ乃免おくことハ紫をさハあぬまにかたふんをかけらさ酒
 と聞えけむハ返ハ中宮乃小辨
 今宵たふ赤らさるるくさむしふ横也る華を人ハ見せば
 さいおまきく遠くさけりそ秋むけすく語りひく兼好
 さいぬく乃名跡さるりふ志わくやかハかたりの葛乃下道
 世乃くハあけかきと朝霧了敬馬さく世まきらりぬ
 種生傳ハ頃堀河乃太相國基具と聞えハ時了を
 五ひく所覚え日出たふりしつと失むくハ不藏と云

雨ふゆ日川うけか秋
 早蕨乃も終ふしをさく見ハ消く烟の泣を哀さ
 見教まに後乃雨さうある消くさう乃秋のさりぬ
 まはハ矩政門院乃一糸とやをさるおひたりく女と
 我うく乃またえ子知ぬ外よまき見乃水乃まゆふんた
 堀河太相國々永仁四年十一月三日出家同五年五月十日
 兼好と尊卑幼殿見也其葬乃九年ハ永仁六年ふし
 乃時たり
 人ハ知けむハおし通ひたるつらハふせく思ひくゆたきと

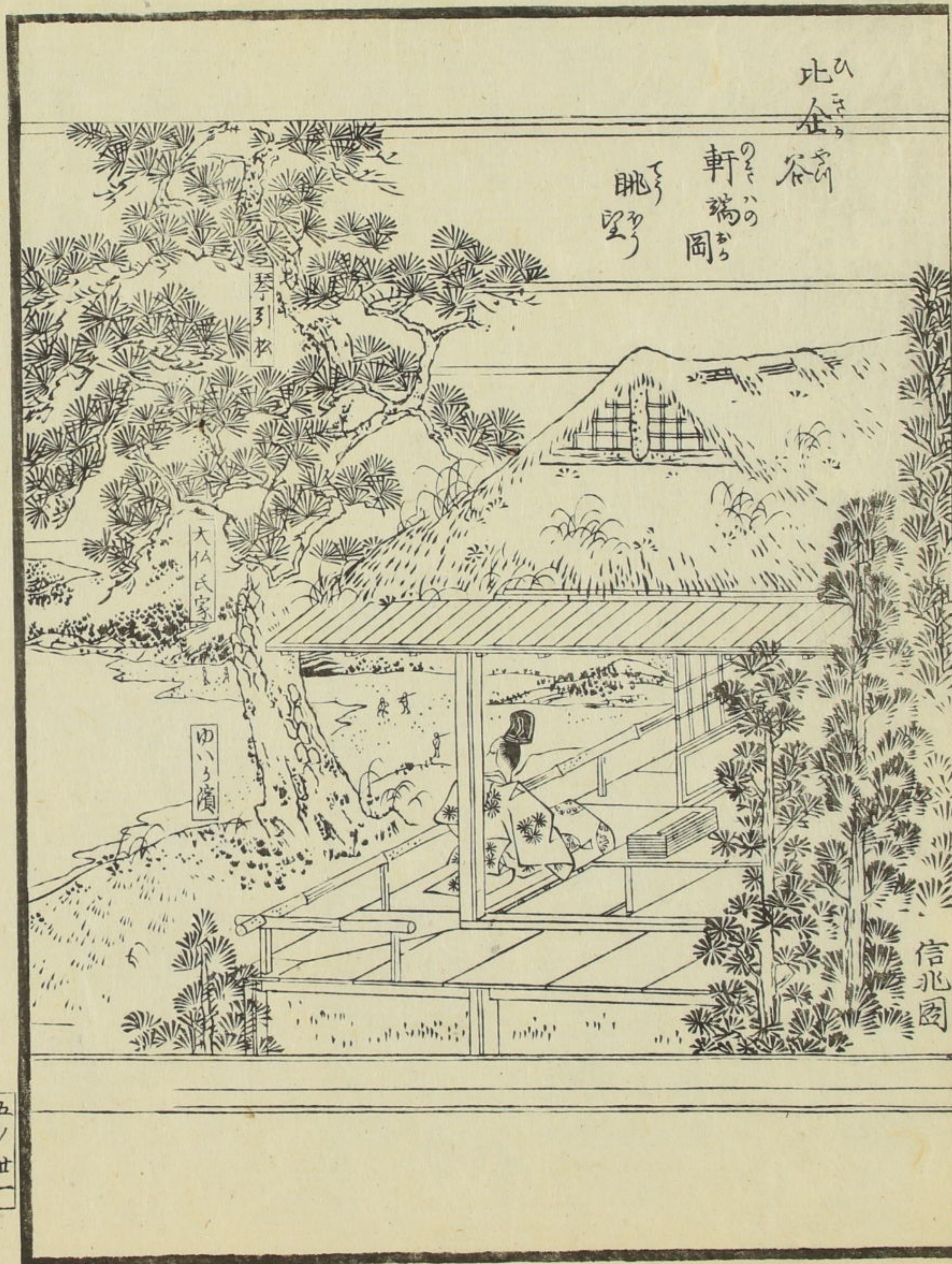
えあましく還つまき續くゆりける

志乃入山まきことやふ道もあまゆぬふあとは人もあまそれ
いふしこく父持守け款を見出く打ちらたち田舎へまり
一同了まめ固く守らまきり兼ぬあまを傳聞くいりけり
かかーつらんおーまは融しまきまを都乃まゆ居まま
まゆくねくま東乃まきいさゆまいさり旅乃か子孫の宿乃
都乃居士乃いといとちく見也

都乃まきおまい居り終しゆ乃根を都乃の岡ま出くも
見ゆる子

鎌倉比企谷妙本寺乃境内了琴瑟乃松といふあまその
松乃あるゆりまを軒乃の岡と云ふ彼寺乃宿記るこ

也兼ぬ乃款けまあまきよめ款了ハあまき款り後花草子
鎌倉の海に鯉魚と云魚ハ彼境了ハまき船まあまけ
頃ゆかかまをれあまそれハ鎌倉乃年より乃中流り
ハけ魚をの連ら養うりハ世まきハまきくしき人乃あま
出款了まへらまき頭ハ下都もくまみ切く捨た
まをねかつかと書たまハ鎌倉り住ことハ懸ハあま
まやたまけ琴引松乃邊り居たらんおま妙本寺の
二代日朗上人左山中のまあま
氏文了載せま日本紀余け事を聞け地乃形勝を向
通證まきりく見也
了居士乃瞻望すことり言語了絶く兼ぬの前款實景を
賦きりとねり



教少く崩御す一廿八日大覺寺乃良乃山麓蓮花峯寺
の傍に葬め奉教此時兼好に十三歳世乃中の坊に色ぬ習
たう形をた多しハ聞くるりりた子賢き人の驚くことを知
せうし海くく幼きより深き津恵了馴むつひなり一山を
おしく津後の業いと懇うは入まつ世を背り海くと心
まき乃ち杖のたくれ

世乃中を杖田うはまきくなりぬ也ハ我身ハ並とて
不く縮の家を見く

かゝく比叡ふろ乃乃ち横川あく本意乃如く多年拜趨の
冠帯を脱く三世了を乃持多羅を脱く一の名を改め

兼好法師と申てたりその程乃く

必をくく浮世乃外ハか々也と由遁りてものハんあり
靈山院少く生身供の式を書き興り書けり

うハハ庵さ便里とはあ也水笠乃後く人ハハ世形と由
靈山院ハ東塔北谷あり中頃竹林院と号しけるり
今まき舊名く復て天台座主女一世少僧都陽生の坊
たり兼好乃頃々天台座主百一世僧正道潤乃任せり
由り時なり道潤傍心ハ二条園白良賢乃九男みく教
法中良志乃叔父あり

持く扇を伸みなるく
常ふま心深ハ乃解了たハハ扇乃風く愛やまらん

彼天公大師の月隱重山字拳翁譬之とのこゆひ々かた
ひ寄し形り又冲堂靈心乃板を名色は永仁六年とかや
彼久世乃二位又部乃大乗經淨供養乃折のありて
孫けるうかと書く

ひくををあたと書く
と書付らたから霧う打残し幽く足折り上良とみく
松風を絶ぬうくと閑く昔乃琴の縁あをかり終
おあし心全動寺あ夏の次明る全月をんく
冬之音りさくえぬ心の甲斐もかきくも月折短歌の月
小倉乃宮の伝さむひらる不とり人谷う酒う有明乃月
おきうろく囁く色く乃花を折く傳ふならんと甘とく

月残り露むとらんあ大難乃花を折く傳ふ供さんと語
らむけを今更おりの出く

むらおりの入籠乃花を折かきく手折く今も子向ける
延政門院一條も今々時を失かひあをくのあま立うたる
よを傳うふけいひおとん

おのひる色ひあふさやふ伝房く若を志の心種の暖を
返く

思ふらんむらにいと世乃中いあはぬふ世乃伝房の
世間さむくあうく中納言資朝々右少弁後基朝長を
謙倉より使来りくあう下里ぬそのうち折乃肉のうつ
里あせうく人々ゆきくおくあうゆくと

のうへへきあまらるるあまらるるに、昔の思ふ如く、
正中元年九月廿二日丙午中納言資朝卿義人氏後
鎌倉へ下向ありしより皇年代畧記外補任等ふん
大乃頃兼好寺園ふり住しけふあはへ

あふとく 頓阿法師乃律へ

よらましく孫さ免のつゝなましく由海そ由秋不登たふあせ
よ孫たすへせふゆりとりめを向乃首尾ふをきたふり
頓阿法師乃律へ

よ海ゆり孫さ免我せこまこいにかをそりふたふ志し
と孫さ免さく孫さ免さくとい魚教あり世乃中のさ海おひ
やまへ 頓阿双林寺
さめるころふや

後醍醐天皇隠岐より還幸す海しけ色ハ中納言為教卿
乃律へ

代々を重くおさむ家乃ゆふは志りそ騒く秋秋の浦浪
いふと形く都もまきりく成け色ハ本曾乃ふまきり
歩坂乃あまらるて

おひたつ本曾乃麻衣あさく乃と深く居ひ令社のま
と河く庵引むらひて去りいり

本曾路名所圖會ふ兼好法師菴室乃跡ハ霧原ふ乃中ふ
猿猴名所と称するあり兼好と猿猴と音便通す故より
山中乃志訛すりを今いま猿猴と呼ふと見ゆ余未
曾路を徑細き一ハ夜落合驛義濃信濃乃至

二田の境

去つらひとそ位しける觀應元年二月三日兼好法師夜不臥
り一岡戸一和氣清元不勅ありく藥を個せせりせける不
兼好法師勅定乃りけりかきな去とふれとも生死無常の速
かたしとハ世捨人乃り終く口口設る不とく頭をうくく是を更
を清元もせんくせくく都子還王かくと奏しけり二条教下
良基あまを岡戸清元乃り申あり引發おんくと披發ありく
いそり伊賀國より下向し師一師名終乃り所相傳ありく返ら
を後ひしとやおあ一月十六日終年二十九歳ふしと岡寂
せしと成忠乃り評より都をりける洞院相國を賢をそめ親
りり方くへ告たりける菴乃り心入殘と去ハ古事乃り法華
經自序乃り老子經源氏物語須磨の事乃り春悞阿り書たる

中乃り乃卷神代卷二冊及古書拾二つと黒く麻の衣二つ
その外ハ衣乃り衾と餉乃り器ハかまなりとや次その頃石仕し命
松丸と云童日を命く致下良基へ系くすけるハ正月廿八日
兼好法師のよめり歎
有とたよふあはれぬあ乃り不とや我らふ近とあけり月
内崇光院中光嚴光后乃宮まけをあえれと同食く兼又
十石料足二子足を細くり通照寺の僧不仰せて園分寺ふ
葬りせ勢ふハ田井乃り名墓をつき二月廿八日權大僧都
を贈らせらる二七日乃り冥福を修せりといとそ
田原教の種生傳を主と具他天保壬寅より百九十
三年乃り及へり

北畠准后伊賀國記了兼好東抄事終而又任吉田山或
 棲並岡麓伊賀守攝成志慕旧友縁招之結庵于伊
 賀國見山麓田井尾遂遂但生素懷於伊賀國分寺嘗
 葬送之事田井尾築墓遍昭寺僧修法事之塔後云觀
 應元年二月十六日兼好法師と記さ於園大厩と同一
 け連ハ伊賀國少く回寂入し一ハ正しく説かるへ
 徒然草古今抄弘安八年小生色觀應元年四月八日
 六十八歳少く卒を彰形の高野山に於て西光院了
 今もつゝ位牌ありと云傳ふ
高野山南谷乃内ニ西光院谷
と云あり其谷了西光院あり
 然也と四月
 同日誤たり
 同冬考抄不處心乃兼西教寺了兼好乃位牌ありと南

中々暮ハ双忌不あふり形也と今ハ處乃その由あり以
 と云
此抄乃作者兼好乃惠空和尚ハ長泉寺の墓を
去りさかすありあり寸遊世好事乃其の墓に記
かまハかく記さしあり西教寺を坂本の大窪山智
兼院西教寺を多へ一而基ハ真盛上人物記ハ藥師如
來寺
 同貞徳抄不徹書礼云兼好を徳大寺院乃諸大夫少く
 官罷にみく有け連は内裏乃病直了兼好子玉体た
 祥之をり後宇多院崩御の後遁世志けり
職原抄不罷ハ
ハ藏人可の属
 兼好六位侍乃武勇不堪くる
 種生傳不内乃病直より退かんとけり秋乃戸の夜の
 方不あやけか不香乃趣を相あうに怒り邪下
 人皆思ふく逃す不脱不所教へ翔入あんとけりハ

兼好村溪夜乃多^りやあふ^い乃^や矢を^り射^けか^りあや
ま^くひ^くあ^ふ今^いの^うは^な弦^乃音^不驚^くけ^きみ^く
飛^ひ入^りんと^する^をま^く是^を由^射と^まく^る皆^入三^考
て^是を^見け^ば一^川の^鴨の^やら^く思^へる^毛生^さら^う
今^一川^ハ雁^乃如^くあ^く毛^色極^めあ^うる^博士^を
や^らく^代名^の名^を尋^ね作^らせ^しあ^らく^勅答^する^を
き^た怪^しま^ると^乃ま^くひ^くま^りあ^らく^志り^有
て^は鳥^二川^かり^る物^とを^りく^うせ^にま^く

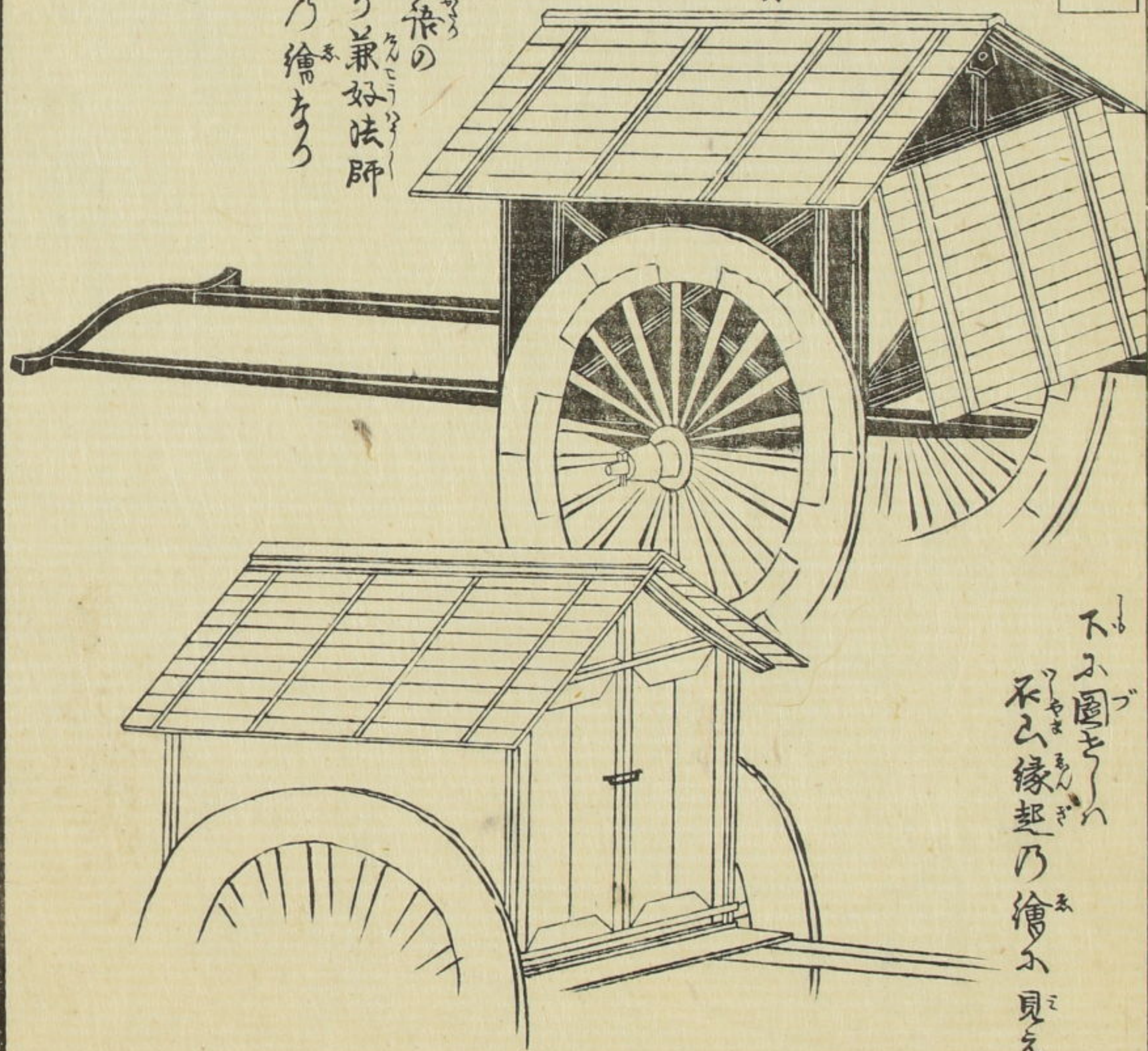
高^武孫^守師^直塩^次高^貞乃^妻ふ^をく^は艶^書を^兼好^信
呼^ぶ書^きく^は仲^たあ^らじ^に見^へたる^まを^福き^しもの
本^朝遜^史冬^信一^生之^過錯^也可^慨惜^鳥とい^ひ杖^業隠^す
あ^やま^る

逸^傳ハ物^我相^忘た^るり^やと^云里^今披^り高^貞乃^殺せ^り
ま^く乃^延元^三年^乃て^ふく^兼好^五十^七歳^伊賀^國ふ
て^國見^山乃^麓不^菴を^造り^新か^まは^け事^大に^疑へ^り
兼^倉成^氏年^中の^事ふ^正月^九日^初子^日乃^相當^ると^まく
見^好法^師乃^種乃^祝云^をり^根松^をま^持り^て
糸^るま^く見^好法^師ハ^管領^評定^乃亭^ハ由^おり^出
る^とあ^ら見^好法^師乃^根松^と寝^待と^相通^りく^艶書^を
ま^く乃^と沙^汰き^かる^一か^ら乃^吉田^乃兼^好乃^く
ハ^あら^まか^へる^兼好^と云^る能^書乃^道世^に
初^子の^見好^と見^く寝^待の^見好^あら^まか^へる^林子^乃論^由草^の
山^の贊^由後^と云^へる

文車

徒然草七十二段了おなくく見くはくやらぬハ文車乃書藝塚乃ちり

上小園さうの
かろく叶物集の
繪了載了兼好法師
より前了乃繪了

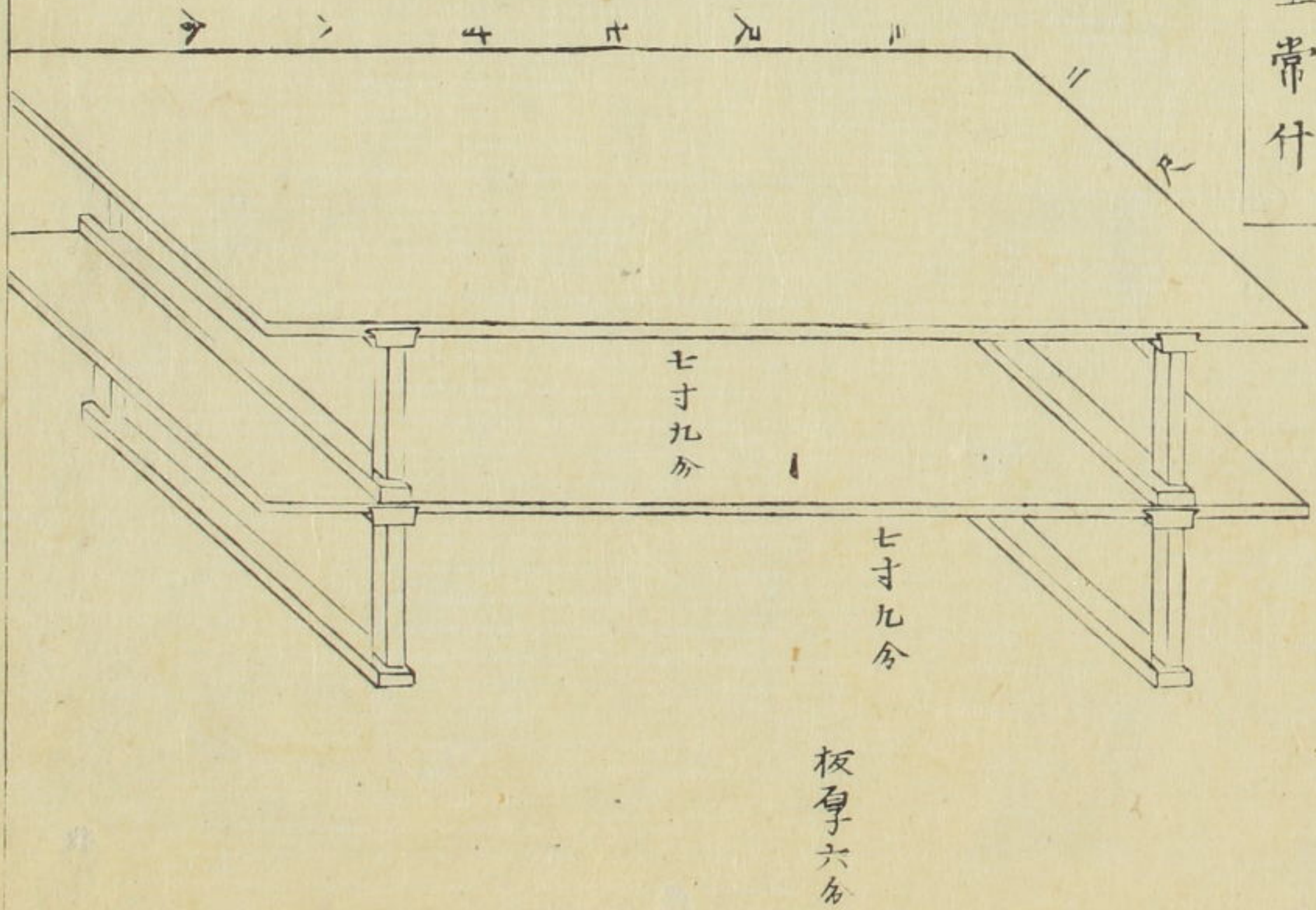


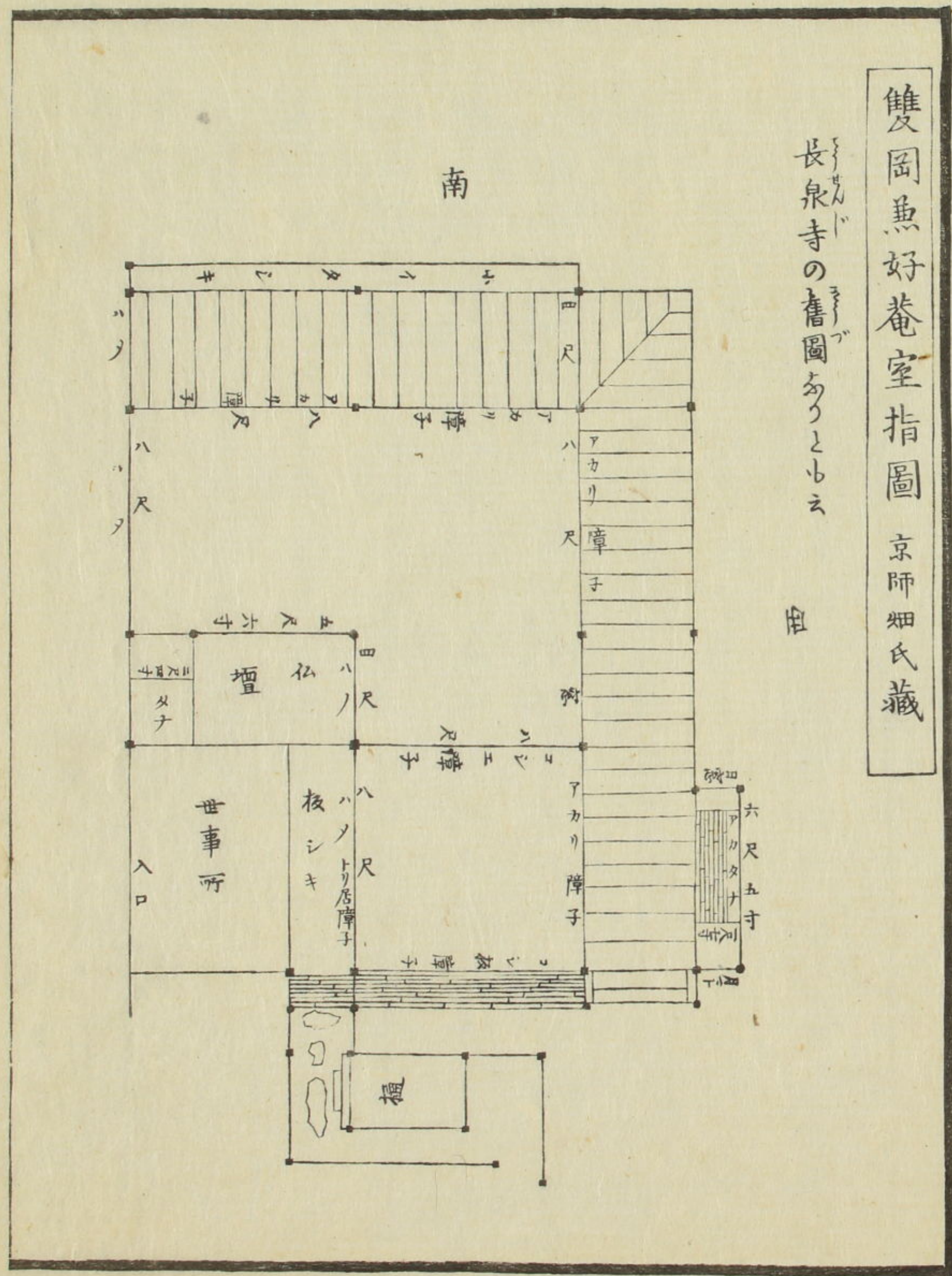
下小園さうの
不縁起乃繪不見了

文書棚

兼好菴室常什

山城國葛野郡柵尾
高山寺三尊院脇机と
云物全くハ寸法と同一
件脇机ハ用ハ明恵上人
用ゆり知と云ハ六百年
前乃典刑と云へり
以文書棚檜を以て作る
重ねくハ棚と云へ並へハ
校書机了用ゆへり

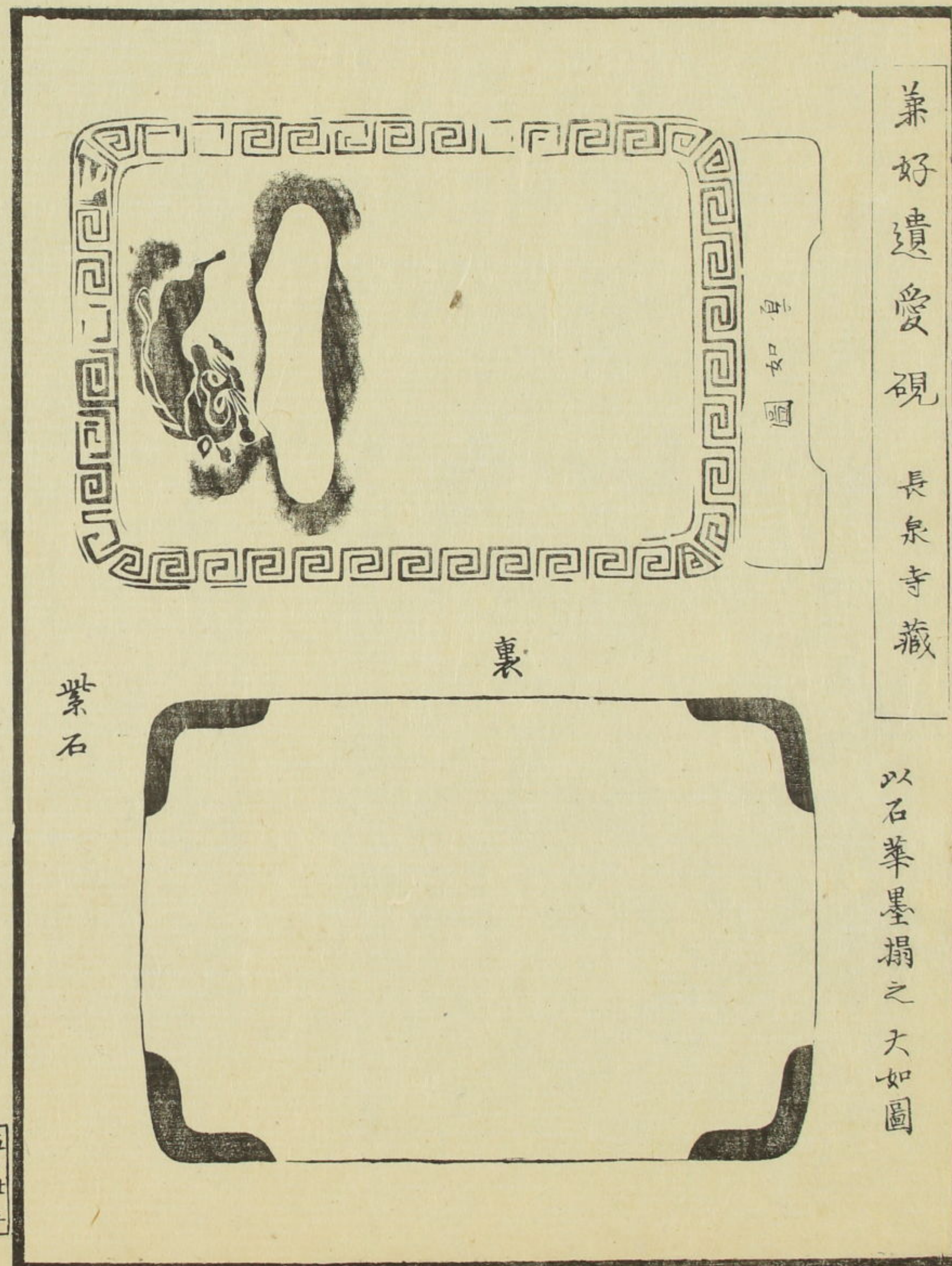




雙岡魚好菴室指圖 京師細氏藏

長泉寺の舊圖ありとも云

由



兼好遺愛硯 長泉寺藏

如圖

以石華墨搨之大如圖

紫石

此菴室少く徒然草を著しける由云傳人此ハ大肥短平
乃説の如く正卷を全くおほ菴室少く書たるたうり
下卷多延元三年伊賀国乃困見山禁乃菴室少く書た
る中亦同人乃説る見在然るる以菴室今た改作
て指圖と違へ里又徒然草の抄ハ壽命院立安法印の
抄ニ林道春乃野槌卷十三松永貞徳乃慰草卷八長頭
九抄卷二大和因氣末乃古今抄卷八水藤盤齋抄卷十三高階
揚順乃句解卷七北村季吟乃文段抄卷八南部宗壽の諺解
五卷青木宗胡の鉄槌卷十山岡元鄰乃増補鉄槌卷六高田宗
賢乃大全卷十三惠空上人乃冬考卷八岡西惟中乃直解卷十
浅香山井の大成卷廿支考乃讚卷八茅多卷十世子卷十仍るる

兼好法師家集の首小家集事 秋負事不可定之多少
隨意 或十六首或七百九十首之百餘首と云々也 長
秋連秋等相交贈答勿論也 又非贈答他人秋隨便多
書載之 部立事合不有之 雖有分中人不可然尤甘
心者也 卷頭事無部立之者 上者可任意哀雜等又秋
勿論也 哀傷秋事自卷以才十十六番云之 惠岑集如
以 詞事如日礼物後長書後又秋合判詞是也 友実
心次書其才學常事ニ已正得以意之書之とあり、その
奥書ふ以一冊者兼好法師自撰家集草本気波集不流
布于世如今幸覽々々秀秋能去奇觀何去如之不堪
感悦聊誌之 寛永中三曆初秋と句 長秋負外監通村

判中院通村云
 兼好法師乃秋了

手捲乃野色の草葉比長樹子身ハあらう乃かき乃きむけき
 とあふを賞しと手捲乃兼好と称し頓阿法師乃

月窟教淨回の面よふと鴨の氷よりたけあけりこ乃き
 と云を以て淨田乃頓阿と称し淨安法師乃

湊江乃あふりよ立るありの次第々々浦風そふく
 こ云ふく湊江乃淨弁と称し慶運乃

庵結人ハ乃まぎの夕ひさるあふを落るあうとそ記
 とり多を以て祇舟の慶運と称し合々私秋に天王と云

先進繡像玉石雜誌巻第五終

大坂 書林

心齋橋通北久太郎町 河内屋喜兵衛
 心齋橋通備後町 河内屋卯助
 心齋橋通本町北 河内屋和助
 心齋橋通博良町 河内屋茂兵衛
 日本橋通一町目 河内屋茂兵衛
 日本橋通二町目 河内屋佐兵衛
 日本橋通三町目 山城屋佐兵衛
 中橋廣小路 小林新兵衛
 芝神明前 西宮弥兵衛
 日本橋四日市 岡田屋嘉七
 大傳馬町二町目 上總屋總兵衛
 横山町三町目 丁子屋平兵衛
 浅草茅町二町目 和泉屋金右衛門
 下谷池之端仲町 須原屋伊八
 下谷御成道唐人館横町 岡村庄助
 紙屋徳八

江戸 書林

